

動詞 *invite* の語彙意味論*

The Lexical Semantics of the Verb *invite*

出 水 孝 典
DEMIZU Takanori

1. はじめに

動詞 *invite* は他動詞で人を目的語に取り「…を招く、招待する」と一般に訳される。この動詞に関して、かつて池上（1981）は、結果の達成を含意する他動詞 *kill* と対照する形で、次のような説明を行っている。

- (1) 一般に、ある意図的な行為がなされる場合、その行為によってある結果が意図されていることがある。その種の〈行為〉を表わす動詞には、意図された結果の〈達成〉までもをその意味範囲の中に含んでいるものと、〈行為〉だけを表わして、意図された結果の〈達成〉まではその意味範囲に含んでいないものがある。前者は例えば英語の *kill* や日本語の「殺す」で相手の死が達成されたことまでを意味する。後者は例えば英語の *invite* や日本語の「招待スル」で相手は必ずしも招待に応じて来るとは限らない。従って、次のような差が出てくる。
- (2) a.* 彼ヲ殺シタケレド、死ナナカッタ
b.* I killed him, but he didn't die.
- (3) a. 彼ヲ招イタケレド、来ナカッタ
b. I invited him, but he didn't come.

（以上 池上 1981: 266-267、番号は本論文の著者による）

では、英英辞典ではこれらの動詞がどのように定義されているのだろうか。Macmillan English Dictionary は、*kill* に (4 a)、*invite* に (4 b) の定義を与えている。

*本稿の内容の一部は、神戸学院大学人文学部人文学会の第18回人文学会研究会（2017年10月14日、於：神戸学院大学）、および英語語法文法学会の第26回大会（2018年10月20日、於：立命館大学衣笠キャンパス）で発表したものである。コメント等を頂いた方には感謝したい。また当時の同僚であったアメリカ人講師 Michael Greisamer にはインフォーマントとして協力して頂いたのに記して感謝する。残された瑕疵や齟齬は筆者によるものである。

(4) a. to make a person or other living thing die

b. to ask someone to come to see you or to spend time with you socially

(<https://www.macmillandictionary.com/dictionary/>、下線は筆者による)

もし池上の言うとおりであれば、kill は make という〈行為〉と、die という意図された結果の〈達成〉の両方をその意味の範囲の中に含んでいるのに対して、invite は ask という〈行為〉だけを表して、意図された結果である come や spend time の〈達成〉まではその意味範囲に含んでいないことになる。

動詞 invite が結果の〈達成〉を表さない以上、その〈達成〉が定める事象の終結点も存在せず、事象全体は非完結的になることが予測される。そこで、Vendler (1957)、Smith (1997) を始めとする動詞の語彙アスペクトに関する文献で用いられている時間副詞句 (for 句/in 句) によるテストをここで適用してみる (これに関しては出水 (2023a: 158-165) で分かりやすく説明している)。この種の時間副詞句による判別テストに関しては、for 句 (持続時間を表す副詞句) は [非完結的] な動詞句、in 句 (所要時間を表す副詞句) は [完結的] な動詞句と共起した場合のみ自然な文になるというのが、この分野での共通理解となっている。

さて、動詞 invite に for 句と in 句を付けた例文をインフォーマントに提示して判断してもらったところ、以下のような結果となった。

(5) a. John invited Mary for an hour. (ジョンはメアリーを1時間招待した)

b.* John invited Mary in an hour. (*ジョンはメアリーを1時間で招待した)

これは結果を含意しない [非完結的] な動詞としての典型的振る舞いであり、池上の言うこと以上には何もないように思われる。

しかしながら興味深いことに、インフォーマントによると、(5 a) では for an hour が「来るように頼む行為が1時間続いた」という一般的な持続時間を表す解釈以外に、「1時間のイベントに招待した」という招待先で過ごした時間を表す解釈も可能だという。そうだとすれば、come した結果 (の spend time) が1時間持続するという解釈も可能だということになる。だが、この後者の解釈はどのような仕組みによって生じるのだろうかという疑問が残る。

以下本稿では、動詞 invite の語彙的意味を踏まえた上で、それに対する時間副詞句の修飾関係を探ることによって、なぜこのように勧誘時間を表わす解釈と滞在時間を表す解釈の両方が可能となるのかを考察してみることにする。またその過程において、今日の Rappaport Hovav と Levin によって提唱された語彙意味論で、動詞 invite がどのような分類・位置付けをされるべきなのかを明らかにする。

本稿の構成は以下のようなものとなる。初めに2節で、Rappaport Hovav と Levin による語彙意味論を導入し、動詞 invite がどのように位置付けられるのかを検討する。続く3節では、動詞 invite の実例を引用しながら考察し、この動詞の意味的重点が come や spend time よりもむしろ

ask にあることを示す。さらに4節では、for 句（持続時間を表す副詞句）のかかり先をめぐる議論を引用し、それが動詞 invite とどのように関係するのかを述べる。最後の5節はまとめである。

2. 様態動詞と結果動詞

動詞のうち、状態動詞ではない動詞、つまり動作動詞（非状態動詞）は、2つに下位区分されるというのが、Rappaport Hovav and Levin (1998) 以来、彼女らの研究で繰り返し述べられてきた主張である。具体的には、「様態」（どのようなことをするのか）は語彙的に指定するが「結果」（どうなるのか）は未指定である様態動詞と、「結果」（どうなるのか）は語彙的に指定するが「様態」（どのようなことをするのか）は未指定である結果動詞の2種類である。以下では、この区分に基づく「様態・結果の相補性」を見たあと、「様態」「結果」という概念そのものに関する「尺度」に基づく定義を導入し、それにより動詞 invite がどのように位置付けられるのかを見ていく。

2.1. 様態と結果の相補性

語彙意味論研究で1つの大きな節目となったのは、Rappaport Hovav and Levin (1998: 100-101) で導入された様態動詞、結果動詞という動作動詞の下位区分である。具体的に言うと、sweep, whistle, run などの様態動詞が、動詞の表す行為の様態のみを語彙化しているのに対して、break, open, arrive などの結果動詞は、動詞の表す行為の結果のみを語彙化しているということだ。このような下位区分を設けると、両方の性質をもつ、いわば様態・結果動詞のようなものが存在するかという疑問が生じるが、彼女らはそのような動詞は存在せず、「様態」「結果」のいずれか一方しか1つの動詞は語彙化できないという制約を、以下のように提示している。

- (6) MANNER/RESULT COMPLEMENTARITY: Manner and result meaning components are in complementary distribution: a verb lexicalizes only one.

(Levin and Rappaport Hovav 2013: 49)

(「様態・結果の相補性」: 「様態」「結果」という意味構成要素は相補分布をなす。つまり、1つの動詞が語彙化するのはいずれか一方のみである)

これに基づく形で動作動詞の事象構造類型（事象スキーマ）を提示すると以下ようになる：

- (7) a. [x ACT <MANNER>] (自動詞) [様態動詞]
 b. [BECOME [y <STATE>]] (自動詞) [結果動詞]
 c. [[x ACT] CAUSE [y BECOME <STATE>]] (他動詞) [(使役的) 結果動詞]

(cf. Rappaport Hovav and Levin 1998: 108, 2010: 24; 出水 2018: 126-127)

これらに含まれている ACT, BECOME, CAUSE は基本述語と呼ばれ、動詞の構造的意味（多くの

動詞に当てはまるスキーマ的意味)を表す。一方、ACT を修飾する様態 (〈MANNER〉)、BECOME の項となる結果状態 (〈STATE〉) は定項 (あるいは語根) と呼ばれ、構造的意味にスキーマ化できない各動詞固有の意味を表す。1つの動詞が語彙化する内容は1つの〈 〉で表される要素、つまり「様態」(〈MANNER〉) か「結果」状態 (〈STATE〉) のいずれかとなる。そして、前者は ACT の修飾語、後者は BECOME の項になるという1つの役割を果たすことしかできず、ACT と BECOME の両方にいわば「二股をかける」ことは許されないということだ。これによって「様態・結果の相補性」という概念が、語根 (定項) の事象構造類型 (事象スキーマ) への組み込みに対する制約として定式化されている。

さて、x, y などは事象の参加者を表し、動詞の表す「事象」という舞台に参加する「役者」のようなものである。様態動詞の事象スキーマには x しか含まれていないが、sweep のように Tracy swept the floor. のような他動詞用法をもつ様態動詞の場合、the floor に相当する参加者が追加される。これはもとの類型ではなく、各動詞固有の意味を表す定項 (語根) の意味から補充されたものであるため、「定項参加者」と呼ばれ、[x ACT 〈SWEEP〉 y] のように下線付きの y として表示される。このような定項参加者は、統語的な具現化が義務的ではないため、sweep のように目的語が省略された自動詞用法でも使われるというのが彼女らの主張である。

2.2. 変化尺度の有無による様態・結果の定義

以上のような仕組みを構築したのち、Rappaport Hovav (2008: 17)、および Rappaport Hovav and Levin (2010: 28) では、漠然と「様態」「結果」と呼んでいた概念を、「尺度」という新たな概念を用いて定義しなおしている。

Rappaport Hovav (2008: 17) は「尺度」を「特定の属性に対する、値の順序づけられた集合」だとしている。そして、「様態」と「結果」の違いを、それらが表わす変化における「尺度」の有無だとしている。具体的に言うと、Rappaport Hovav and Levin (2010: 28) にあるように、様態語根がすべて尺度のない変化を指定するのに対して、結果語根はすべて尺度のある変化を指定するということだ。

様態語根を (7a) に組み込むことによって作られる様態動詞は、単一の変化尺度をもたない変化を表す。一方、結果語根を (7b) (7c) に組み込むことで作られる結果動詞が表す変化は、単一の属性がもつ値の、特定の方向への変化の順序づけられた集合を含むので、その尺度に沿った特定の方向への移動として特徴付けることができるものとなる。

Rappaport Hovav と Levin はこのような様態動詞、結果動詞という動作動詞の2分類を提唱しているが、それに対してそれ以外の分類も存在するという主張もある。Fellbaum (2013) は、動作動詞に様態動詞でも結果動詞でもない第3の分類として「目的動詞」(purpose verb) があるとし、exercise, treat, cheat, control, help をその例として挙げている。

- (8) ...verbs like *exercise* etc. do not contribute a MANNER component to the meanings of their subordinate verbs. Instead, such verbs seem to express concepts that encode a kind of telicity or

goal or purpose: One exercises, helps, treats, cheats, etc. with some goal or purpose in mind, and this goal or purpose is generally intended by the agent of the event. (Fellbaum 2013: 374)
 (exercise のような動詞は、様態の意味構成要素をその下位動詞の意味に与えていない。むしろこのような動詞が表していると思われる概念は、ある種の目的性、つまり目標や目的をコード化するものである。運動したり、助けたり、治療したり、だましたりする場合、何らかの目標や目的を念頭に置いており、この目標や目的を一般に意図するのが事象の動作主なのである)

このような動詞は、ある行為の目的のみを語彙化しており、様態自体は意味構成要素としては含まないため、様態動詞とは別の分類として立てるべきだというのが、Fellbaum の主張である。

しかしながら、Levin と Rappaport Hovav 自身は、exercise のような動詞も、尺度のない変化を表す以上様態動詞の一種であると考えている。Rappaport Hovav and Levin (2010: 32) によると、典型的な様態動詞は、多くの変化が組み合わさった複合的な変化を表す。このような変化は、複合的であるが故に、単一の特別扱いできる属性（ひいては尺度）をもたないことになる。それに対して、exercise のような Fellbaum の言う目的動詞は、行為の目的を表すだけで明確な様態を指定せず、茫漠とした変化を表す。このような場合、複合的であるからではなく、明確な様態をもたないが故に単一の尺度を抽出できず、尺度のない変化を語彙化していることになる。

- (9) Furthermore, verbs of non-scalar change need not always be so specific about the precise changes they involve. The verb *exercise*, for example, requires an unspecified set of movements, whose only defining characteristic is that they involve some sort of activity, typically physical, but on occasion mental. (Rappaport Hovav and Levin 2010: 33)
 (さらに、尺度のない変化を表す動詞が、それらの正確な変化をそれほど指定する必要があるとは限らない。例えば動詞 *exercise* が要求するのは、はっきりしない一連の動きだが、それを定義する唯一の特徴として言えるのは、その動きがある種の活動であり、典型的には身体活動だが、精神活動のこともあるということだ)

つまり、Fellbaum (2013) が第3の分類として提示した目的動詞は、尺度のない変化を表す以上、Rappaport Hovav と Levin の分類では、典型的ではないものの様態動詞の一種に分類されるのである。

以上で見たような、典型的な様態動詞と exercise のような目的動詞（周辺的な様態動詞）の差異は、実は Ritter and Rosen (1996) の言う述語の（意味指定の）強弱の違いだと考えられる。出水 (2015: 116-117) はそれを踏まえ、様態動詞と結果動詞の下位分類を以下のように整理している（なお、「目的動詞」の特性に関しては、出水 (2019: 43-68) でさらに詳細に説明している）。

	意味指定が強い	意味指定が弱い
様態動詞 [=非結果動詞]	複合的な変化の組み合わせを表す、従来の 様態動詞：hit, kick, rub, scribble, sip, sweep, flap, laugh, smile, swim, walk,...	Fellbaum の言う 目的動詞：exercise, treat, cheat, control, help,...
結果動詞	属性が明確な結果動詞：break, empty, fill, freeze, kill, open, shatter, widen, arrive, die, exit, faint,...	属性が未指定の結果動詞：increase, decrease

では、動詞 *invite* はこれらのどこに位置付けられるのだろうか。以下でそれを考えていこう。

2.3. 様態動詞（目的動詞）としての動詞 *invite*

確かに動詞 *invite* は様態の指定が弱く、漠然とした行為の目的しか語彙化していない。そのため (10 a) の結果動詞 *dry* と同様に、動詞 *invite* も (10 b) に示すように *by* 句による様態の敷衍が可能である。*by* 句に関する振る舞いだけを見れば、結果動詞のように思えなくもない（なお目的動詞の *exercise* も (10 c) に示すように、*by* 句による様態の敷衍が同様に可能である）。

(10) a. I *dried* clothes {by putting them into a dryer/ by putting them out in the sun}.

(cf. Rappaport Hovav and Levin 1998: 102)

b. I *invited* them {by talking to them/ by sending an email/ by clicking on their name/ by saying, “Come and follow me.”}

c. I *exercised* {by jogging/ by walking/ by swimming/ by playing tennis}.

しかしながら、目的動詞は様態動詞と同じく尺度のない変化を表すものの、行為の目的しか表さず明確な様態をもたないので、様態を *by* 句によって敷衍できても不思議ではない。問題はそこではないのである。

動詞 *invite* が結果動詞と明確に異なるのは、結果状態を指定していないことである。これは、*invite* の目的語が「影響を受ける」(affected) ものではないことを示す以下のデータからも明白である（このような目的語が「影響を受ける実在物」(affected entity) か否かを判別するテストについては、Jackendoff (1990: 124-130, 2007: 198-200) を参照されたい）。

(11) a.* What happened to Mary was John invited her (to dinner).

b. What happened to the vase was John broke it.

もし結果状態が語彙的に指定されていれば、目的語が表わす実在物に、必ずその結果状態への変化が生じるため、その目的語は影響を受ける。そのため、結果動詞 *break* の他動詞用法の場合、What happened to X was...という判別テストで目的語を X に代入して、当該の文を後に続けても容認される。ところが、動詞 *invite* に対して同じようなテストを行うと、インフォーマントは容認さ

的語とするもの 96 例を、以下では考察する。

なお、目的語が事を表すものは、日本語の疑惑を「招く」に相当するような周延的な用法である。また、to 不定詞を伴う用法は、招待の意味が薄れて勧誘・要請に近づき、「人に…するように依頼する、勧める」と訳されるものである。以上 2 種類の用法に関しては紙幅の都合上、今回は考察の対象外とする。

考察対象とする 96 例のうち、35 例が受動態であったので、全般的に見れば能動態で用いる方がふつうだと言える。これらの内訳は、招待目的を表す for 句が 9 例、to 句が 34 例、さらに招待先を表す to 句が 28 例、招待目的も招待先も表されていないものが 25 例だった。以下ではこれを順に見て行く。

3.1. 招待目的を表わす for 句を伴った例

招待する目的を表す前置詞句が for 句となっているものは、9 例（うち受動態 1 例）とそれほど多くはないが、1 つの興味深い特徴が見られる。招待目的である催しそのものが for 句に続いているだけでなく、飲み物（これもある種の招待目的だろう）が for 句に続いている例が見られるということである。

(13) の例はいずれも、for に続く名詞句が催しを表すものとなっている。

- (13) a. Twice a year, Lawrence chartered a yacht, gathered half a dozen beautiful “models” and invited top studio executives for a week’s “fishing trip.”

(Sidney Sheldon, *A Stranger in the Mirror*: 59)

(年に 2 回、ローレンスはヨットをチャーターして、数人の美しい「モデル」たちを集め、撮影所の最高幹部たちを一週間の「釣り旅行」に招待した)

- b. I remember only that Kim was at his villa one evening when Françoise and I were invited for a steak cook-out.

(Warren Kiefer, *The Lingala Code*: 31)

(私が覚えているのは、私とフランソワーズが野外ステーキパーティーに招待された時、彼の邸宅にキムがいたことだけである)

- c. “Good,” he said. “I’ll call you when I get back to New York and you’ll invite me up for dinner.” The telephone clicked off and she put it down.

(Harold Robbins, *The Inheritors*: 170)

(「よかった」と彼は言った。「ニューヨークに帰ったら電話するから、夕食に招待してくださいね」電話がカチリと切れ、彼女は電話を置いた)

- d. ...she had cordially invited Tovah for the interview.

(Irving Wallace, *The Seventh Secret*: 148)

(彼女はそのインタビューのために、心を込めてトヴァを招待したのだった)

これらの例では無冠詞の (13 c)、定冠詞の付いた (13 d) を除くと、いずれも不定冠詞が付いた例

であった。したがって、ある特定の催しというよりもむしろ、機会の1つとしての催しを表しているように思われる。そのような場合、for 句が用いられやすいと言えるだろう。

一方、(14) のように飲み物が for 句で表されている例もある。

- (14) a. If he had the time and the inclination, he would have *invited* the girl for a cup of coffee, but he had work to do. (Richard Osborne, *Basic Instinct*: 193)

(彼に時間とその気があれば、その女の子にコーヒーはどうかと誘っていたが、彼にはやるべき仕事があった)

- b. At the end of the evening the boys brought them home, and Susie *invited* them in for a nightcap. (Sidney Sheldon, *The Other Side of Midnight*: 84)

(その夕べの催し物が終わると、男の子たちは彼女らを家まで送った。スージーは彼女らに寝酒を一杯どうかと誘った)

これらの場合、「コーヒー／寝酒のために招待する」といわゆる辞書的な文字通りの訳を当てはめると不自然な日本語になり、上のように訳すしかない。その点でやや異質な用法とは言えるかもしれないが、飲み物を一緒に飲む目的で人を招待するということなので、動詞 invite が使われているのだと考えられる。

3.2. 招待目的を表わす to 句を伴った例

招待する目的を表す前置詞句として for 句よりも多く見られたのが to 句である。これは 34 例あり、そのうち 16 例（半分近く）が受動態だった。to 句は to dinner が 9 例、to...party が 7 例、to lunch が 3 例、to the wedding が 3 例で、to に続く名詞句はいずれも催しを表すものだった。なお、飲み物を表す名詞句が to の後に生じた例は、収集した用例中には見当たらなかった。

初めに、催しを表わす名詞を伴う例を見てみよう。

- (15) a. “When would you like to see Mr. Yasfir?” he asked.

“Tonight. *Invite* him to the party.” (Harold Robbins, *The Pirate*: 42)

(「ヤスフィル氏にはいつ会いますか？」と彼は尋ねた。「今夜だ。例のパーティーに招待してくれ」)

- b. The only person *invited* to the wedding was Peggy’s brother, Hoop, who flew in from New York. (Sidney Sheldon, *Morning, Noon and Night*: 96)

(結婚式に招待された唯一の人物はペギーの兄のフープだった。彼はニューヨークから飛行機でやってきた)

- c. And why hadn’t he *invited* her to a therapy session?

(Jeffrey Deaver, *The Bodies Left Behind*: 322)

(なぜ彼はセラピーセッションに彼女を招待しなかったのか)

- d. He played golf with the President frequently and was *invited to dinner at the White House* again and again. (Sidney Sheldon, *A Stranger in the Mirror*: 156)
 (彼は大統領と頻繁にゴルフをし、何度も何度もホワイト・ハウスの晩餐会に招待された)

このような場合、催しを表す名詞に付く冠詞に、for 句で招待する目的が表されている場合との違いが見られる。to 句の場合 (15 c) のような不定冠詞、(15 d) のような無冠詞の例も見られるが、for 句の場合にはほとんど見られない、催しを表す名詞が (15 a) (15 b) のような the や、それ以外に this, these, that によって、限定されている例が全部で 12 例あった。これは、to 句に続く名詞によって表される催しが、1 つの機会というよりもむしろ、特定の場所と時間に行われた催しとして捉えられやすいためだと考えられる。これは後で見て行く to 句が招待先を表す場合との連続性を感じさせる。また、他の用法よりも受動態が多いことから、誰が招待主なのかよりもむしろ、どういう催しに招待するかに重点が置かれることが多いと言えるだろう。

3.3. 招待先（移動の着点）の前置詞句・副詞句を伴った例

同じ to 句であっても、招待目的となる催しではなく、招待先（つまり移動の着点）を表すものもある。それらも含め、招待先（移動の着点）の前置詞句・副詞句を伴った例が 28 例あり、うち 7 例が受動態であった。

- (16) a. ...; he would *invite* people to his home and not be there when they arrived.
 (Sidney Sheldon, *Morning, Noon, and Night*: 103)
 (…彼は自分の家に人々を招待しておきながら、客が着いた時そこになかった)
- b. Saturday, Kirov's *invited* me out to his summer house in the country.
 (Christopher Reich, *The First Billion*: 159)
 (土曜日にキーロフは私を田舎にある夏の別荘に招待した)
- c. ...he couldn't imagine *inviting* a colleague to his flat. (P. D. James, *The Lighthouse*: 28)
 (…彼には同僚を自分のアパートに招待するなど想像もつかないことだった)
- d. 'That's why I *invited* Birch and Marvin here tonight, because their support will influence the fate of this bill.'
 (Jeffrey Archer, *Shall We Tell the President?*: 189)
 (「そういうわけで私はバーチとマーヴィンを今夜ここに招待した。彼らの支持がこの法案の命運に影響するからな」)

これらの例では、(16 a) – (16 c) のような to の後に house, flat, home のように居住地を表わす名詞を伴う例が多い (9 例) が、(16 d) のように here が場所を表す例もあり、さらには into 句によって入る場所が示されている例も複数見られる。

3.4. 招待目的も招待先も表わされていない例

最後に、招待する目的も場所も表わされていない場合を見ていこう。こうした例は 25 例あり、そのうち 10 例（4 割）が受動態であった。この種の用例では、招待の目的や場所よりもむしろ、誰を招待したのかに重点が置かれていると考えられる。

- (17) a. The press conference for the British print media was being held in the Drawing Room of Claridge's ballroom off the hotel lobby. Nora Judson *had invited* twenty-four of the best-known and most influential British editors, feature writers, reporters in London, and none had declined. (Irving Wallace, *The Second Lady*: 155)
 (イギリスの活字メディアに対する記者会見が行われていたのは、クラリッジ・ホテルのロビーから離れた舞踏場の応接間だった。ノーラ・ジャドソンはロンドンで最もよく知られ影響力をもつイギリスの編集長や特集記事の執筆者、記者のうち 24 人を招待していたが、断わってきたものは一人もいなかった)
- b. "Let me finish. *Invite* studio heads, producers, directors—people who could do her some good." (Sidney Sheldon, *A Stranger in the Mirror*: 217)
 (「最後まで言わせてくれ。招待するのは撮影所の社長や製作責任者、監督たち、つまり彼女にとってプラスになりうる人々だ」)
- c. "Everybody's invited," Luther said. "The whole street."
 (John Grisham, *Skiping Christmas*: 160)
 (「みんな招待するよ」とルーサーはいった。「町の人々みんなだよ」)
- d. "Did he mention who else was invited?" Junior shook his head. "I didn't ask."
 (Harold Robbins, *Memories of Another Day*: 387)
 (「彼は他に誰が招待されているか言っていたか？」息子の方は首を横に振った。「訊ねなかったよ」)

このような場合、(17 a) (17 b) のように長く情報量の多い目的語によって、誰を招待したのか、それがどのような人であったのかを詳細に述べているのが 1 つのパターンである。また (17 c) (17 d) のように by を伴わない受動態で用いて、招待主よりもむしろ、招待された人が誰なのかを主題として問題にしている場合もある。

3.5. まとめ

以上で動詞 invite の実例を検討してきた。用例から読み解けることをまとめると、以下のようになるだろう。

- (18) a. (17) のように招待目的も招待先も表わされていなくて、招待メンバーを目的語で列挙したり、受動態の主語にしたりした例が一定数見られる。このことは、come より

も ask に重点が置かれていて、来るかどうか分からないが、誰に声をかけたのが問題となっていることを示唆している。

- b. (16) のような着点を伴う例もそれなりの数見られるが、(13) (14) のような招待目的の for 句、(15) のような招待目的の to 句を伴った例を合わせるとそれよりも多い。このことから、やはり come よりも ask に重点があると考えられる。
- c. 以上を踏まえると、動詞 invite の事象構造は、ask が語彙固有の意味の中心で、それが ACT を語根として修飾する形の [x ACT _{<INVITE>} y] だと考えるのが妥当であろう。

以上実例より帰納した (18) の結論は、様々な統語テストの結果から、2.3 節で導き出した結論とも一致していることに注意されたい。

では、[x ACT _{<INVITE>} y] の事象構造でなぜ for 句は y の持続時間に相当するようなものを敷衍する解釈が可能なのだろうか？ 最後の 4 節ではそれについて考えていく。

4. for 句のかかり先をめぐる問題

この節では、for 句（持続時間を表す副詞句）が事象の実際の持続時間を表す用法以外に、ある場所へ移動して現地でどれくらい滞在する目的であるかを表す用法があることを見ていく。それを踏まえて、動詞 invite の催しの持続時間を for 句が表す用法も、その一種であることを主張する。

4.1. 内木場（2004）

内木場（2004: 122-123）は、[完結的] である結果動詞が for 句と共にした場合、「変化後の結果状態を修飾する」という解釈があることを、複数の実例を挙げて述べている。この解釈は、事象構造を用いて説明すると、(19) のように [BECOME [y _{<STATE>}]] のうち、_{<STATE>} の部分の持続時間を for 句が敷衍する解釈だと言える。

- (19) [BECOME [y <STATE>]] [結果動詞]
 ↑ for 句

(19) の解釈の場合、(20) の「for two weeks は移動後の結果状態 (be in Paris) を修飾して、『パリに行って 2 週間滞在した』の意味に解釈される」というのが内木場（2004: 123）の説明である。

- (20) I went to Paris *for two weeks*. (内木場 2004: 123)

ところが、さらに内木場（2004: 123-124）は、(20) の「for two weeks を、[(21)] の for a holiday の for と同じように、「(…の期間を) 過ごすために」という『目的』の意味に解釈することも可能である」としている。

- (21) He went to France for a holiday. (*CULD*) (彼は休暇でフランスに行った)

(内木場 2004: 124)

そして、(20) における *for two weeks* の以上 2 通りの解釈について、以下のようにまとめている。

- (22) このように、[(20)] の例のような *for two weeks* は「…を過ごすために」という「目的」の意味に解釈することも、位置変化後の「結果状態」を修飾すると解釈することも可能である。どちらの場合も *for two weeks* は「期間」を表す副詞句であるが、前者の「目的」の意味で使われる *for two weeks* は主語によって意図・予定・計画された期間を表すと考えられる。

(内木場 2004: 124)

以上から分かるように、内木場 (2004) は *for* 句に位置変化後の「結果状態」を修飾する用法だけでなく、「その期間を過ごすために」という「目的」を表す用法があるとしているわけである。同様のことは児玉 (2002) でも主張されているので、次節ではそれを見ていくことにしよう。

4.2. 児玉 (2002)

児玉 (2002: 37-40) は、(23) のような「完結的」である結果動詞が *for* 句と共に起した文に関して、「この夏私はアメリカへ行って 2 週間滞在した」という「実現された期間」(*realized duration*) を表す解釈がこれまでの研究で指摘されてきたことをまず述べている。

- (23) This summer I went to America for two weeks. (この夏私は 2 週間アメリカへ行った)

(児玉 2002: 37)

ただし、*for* 句が本来目的を表すことから、それに加えて「2 週間の予定で」という「目当てとしての期間」を *for* 句が表すという解釈もあるとしている。

- (24) 第 2 の解釈として、[...] *for* 句は本来 *John ran home for lunch*. (ジョンは昼食をとるため走って家に帰った) のように「目的」(*purpose*)、または *John has gone to America for two weeks*. (ジョンは 2 週間の予定でアメリカへ行ってしまった) のように「目当てとしての期間」(*intended duration*) を表すとする主張がある。

続けて児玉 (2002: 41) は、(23) のような *for* 句が「結果的に実現された期間を表すことがあるにしても、もともと目当てとしての期間を表すとみてはじめて」(25) のような例の解釈が説明できると述べている。

- (25) Yesterday he flew to Washington for ten days, but today his mother died, so he will come back

tomorrow.

(彼はきのう 10 日間の予定で飛行機でワシントンに行ったが、きょう母親が死んだので
明日帰ってくる) (児玉 2002: 41)

(25) の文は、for 句が表す「10 日間」の予定でワシントンに行ったものの、実際には母親の死によって予定を切り上げ、「実現された期間」が実際には「3 日間」しかないままで、戻ってくることを表すということだ。これを児玉は以下のように説明している。

- (26) [(25)] においては but 以下が続くことにより for 句が「実現された期間」でなく、「目当ての期間」を表している。母語話者のなかには「実現された期間」と「目当てとしての期間」を峻別し、例えば [(25)] の for 句に代えて for a stay of ten days や for a 10-day visit などに修正する者もある。 (児玉 2004: 42)

以上のように、児玉 (2002) も内木場 (2004) と同じく、for 句に 2 つの解釈があるとしている。児玉で興味深いのは、for 句が移動後の「結果状態」を修飾する用法は、もともと目当てとしての期間 (目的) を表す用法から来ている派生的なものだと考えていることである。これは、for 句が結果状態の「実現された期間」を表す場合であっても、目的とする期間を表す場合と同じく、主語の意図と関連していることを示唆している。ではこの主語の意図というのは、事象構造とどのように関連付けばよいのだろうか。以下ではそれを考える。

4.3. 事象構造による分析

以下では、内木場 (2004)、児玉 (2002) による for 句の「目的」「目当てとしての期間」が、事象構造によってどのように分析できるのかを見て行く。目的を表す for 句は、内木場 (2004) が以下のように述べていることから分かるように、主語 (= 動作主) の意図に関わる副詞句だと考えられる。

- (27) ちなみに、OED は期間・範囲を表す for の意味を (i) actual duration と (ii) intended duration の二つに語義を分けている。actual duration というのは、文の表す状況を時間的枠の中に位置づける期間副詞句としての用法で、終結点を持たない継続的状态を表す文に用いられる一般的な用法である。(ii) の intended duration というのは、文の主語によって意図・計画された期間を表す用法のことで、for life, for the present, for good, for ever (forever) などの成句がこれに相当する。主語の意図に関わる期間副詞句であるので、本章では主語指向期間副詞句としておく。 (内木場 2004: 124)

そのため、事象構造に関連付ける場合、〈STATE〉や ACT (MANNER) ではなく x そのものを敷衍すると考えるのが妥当だろう。なお、内木場の言う for 句が actual duration を表す (つまり終結点を

持たない継続的状况を表す文に用いられる一般的な)用法である場合、(12 a) で見たように ACT の持続時間を明示するはたらきをする。

では以上を踏まえて、動詞 invite と共起した場合の、for 句の2つの解釈を事象構造によって表示していこう。ここで、冒頭の動詞 invite が for 句を伴った文とその解釈を再掲する。

- (28) John invited Mary for an hour. (ジョンはメアリーを1時間招待した) [= (5 a)]
- a. ジョンはメアリーに来るように1時間頼んだ。(実現された行為の期間)
 - b. ジョンはメアリーに1時間の予定で来るように頼んだ。(催しの意図された期間)

(28 a) の解釈では for 句が (i) actual duration に相当するのに対して、(28 b) の解釈では for 句が (ii) intended duration に相当する。これらの修飾・敷衍関係を事象構造によって図示すると、以下のようになる。

- (29) a. [x ACT <INITE> y] [様態動詞]
 ↑ for 句 ((28 a) (i) actual duration)
- b. [x ACT <INITE> y] [様態動詞]
 ↑ for 句 ((28 b) (ii) intended duration)
 = 期間以外に特定の行事を目的語にできる

尺度のない変化を語彙化している様態動詞の一種 invite の場合、結果動詞の go のような変化後の結果状態 (<STATE>) は語彙化していないので、(19) のような結果状態が「実現された期間」を表す読みは生じない。そのため for 句が invite に関して (28 a) のように「実現された期間」を表す場合、(run や sweep など) 他の「非完結的」な様態動詞と同じく、その依頼行為の持続時間を表すことになる。これを示したのが (29 a) である。一方、(28 b) のように催しの持続期間を表す解釈の場合、内木場の「目的」(intended duration)、兎玉の「目当てとしての期間」を表す用法に相当する。これは内木場 (2004) が (27) で言うような「主語指向期間副詞句」だと考えれば、(29 b) のように x そのもの (の意図) を修飾することになるだろう。

5. おわりに

本稿では数ある英語動詞の中で、「招く、招待する」と訳される invite を取り上げ、語彙化している意味要素はどのようなものかという点から考察した。初めに2節で、Rappaport Hovav と Levin による語彙意味論を導入し、動詞 invite が様態動詞の一種である目的動詞として位置付けられることを確認した。続く3節では、動詞 invite の実例を引用しながら、典型的に共起する前置詞句とそれが表す内容が、動詞そのものの意味とどのように関連しているのかを論じた。そこから、動詞 invite の意味的重点は come や spend time よりもむしろ ask にあることを明らかにし、2節で出した結論とも一致することを見た。さらに4節では、for 句 (持続時間を表す副詞句) のかかり先をめぐる内木場 (2004) と兎玉 (2002) の議論を引用し、動詞 invite の場合、動詞が語彙化して

いる ACT そのものの持続時間を表す「実現された期間」と、動作主の意図した催しの「目当てとしての期間」の両方を for 句が表せるため、冒頭の (5 a) の文に 2 通りの解釈が生じることを明らかにした。

for 句が「目的」「目当てとしての期間」を表す例として取り上げられてきたものは移動動詞が中心であるが、本稿では動詞 *invite* という様態動詞の一種である目的動詞にそれを適用した分析を行ってみた。移動を表さない他の様態動詞に関して同様の分析が適用できるかどうかは、今後追究していくべき 1 つの研究テーマであると思われる。

参考文献

- 出水孝典. (2015) 「様態・結果の相補性をどうとらえるべきか」『六甲英語学研究』第 18 号, 67-122.
- 出水孝典. (2018) 『動詞の意味を分解する－様態・結果・状態の語彙意味論－』(開拓社言語・文化選書 71) 東京: 開拓社.
- 出水孝典. (2019) 『統・動詞の意味を分解する－変化の尺度・目的動詞・他動性－』(開拓社言語・文化選書 82) 東京: 開拓社.
- 出水孝典. (2023a) 『語彙アスペクトと事象構造 (上)－時間特性を診る 14 章－』(開拓社叢書 36) 東京: 開拓社.
- 出水孝典. (2023b) 『語彙アスペクトと事象構造 (下)－事象の枠を捉える 14 章－』(開拓社叢書 37) 東京: 開拓社.
- Fellbaum, Christiane. (2013) “Purpose Verbs,” In Pustejovsky, James et al. (eds.), *Advances in Generative Lexicon Theory*. Dordrecht: Springer Science + Business Media. pp.371-384.
- 池上嘉彦. (1981) 『「する」と「なる」の言語学－言語と文化のタイポロジーへの試論－』東京: 大修館書店.
- Jackendoff, Ray. (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Jackendoff, Ray. (2007) *Language, Consciousness, Culture: Essays on Mental Structure*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- 児玉徳美. (2002) 『意味論の対象と方法』東京: くろしお出版.
- Levin, Beth. and Malka Rappaport Hovav. (2013) “Lexicalized Meaning and Manner/Result Complementarity,” In Arsenijević, Boban., Berit Gehrke., and Rafael Marín. (eds.) *Studies in the Composition and Decomposition of Event Predicates*. Dordrecht: Springer. pp.49-70.
- Rappaport Hovav, Malka. (2008) “Lexicalized Meaning and the Internal Temporal Structure of Events,” In Rothstein, Susan (ed.) *Theoretical and Crosslinguistic Approaches to the Semantics of Aspect*. Amsterdam: John Benjamins. pp.13-42.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. (1998) “Building Verb Meanings,” In Butt, Miriam and Wilhelm Geuder (eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*. Stanford, California: CSLI Publications. pp.97-134.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. (2010) “Reflections on Manner/Result Complementarity,” In Rappaport Hovav, Malka, Edit Doron, and Ivy Sichel (eds.) *Lexical Semantics, Syntax, and Event Structure*, Oxford: Oxford University Press. pp.21-38.
- Ritter, Elizabeth and Sara Thomas Rosen (1996) “Strong and Weak Predicates: Reducing the Lexical Burden,” *Linguistic Analysis* 26, 29-62.
- 内木場努. (2014) 『「こだわり」の英語語法研究』東京: 開拓社.

引用文献

- Archer, Jeffrey. *Shall We Tell the President?* London: Pan Books, 2003. (First published in 1977 by Jonathan Cape Ltd.)
- Deaver, Jeffery. *The Bodies Left Behind*. New York: Simon & Schuster, 2008.
- James, P. D. *The Lighthouse*. London: Penguin Books, 2006.
- Grisham, John. *Skiping Christmas*. New York: Bantam Books, 2010.
- Kiefer, Warren. *The Lingala Code*. New York: Random House, 1972.
- Osborne, Richard. *Basic Instinct*. New York: A Signet Book, 1992.
- Reich, Christopher. *The First Billion*. New York: A Dell Book, 2003.
- Robbins, Harold. *The Inheritors*. New York: Pocket Books, 1971. (First Published in 1969 by Simon and Schuster)
- Robbins, Harold. *The Pirate*. New York: Simon and Schuster, 1974.
- Robbins, Harold. *Memories of Another Day*. New York: Simon and Schuster, 1979.
- Sheldon, Sidney. *The Other Side of Midnight*. New York: William. Morrow & Company Inc., 1973.
- Sheldon, Sidney. *A Stranger in the Mirror*. New York: Grand Central Publishing, 2005. (First published in 1976 by William Morrow)
- Sheldon, Sidney. *Morning Noon and Night*. New York: Warner Books, 1996.
- Wallace, Irving. *The Second Lady*. New York: New American Library, 1980.
- Wallace, Irving. *The Seventh Secret*. New York: E. P. Dutton, 1986.